事業の実績
今年度の高大連携事業の実施日程については、別紙の通りである。全体的には、昨年度の反省を踏まえて今年度は効率的に進めることができた。また、昨年度は新型コロナウィルス感染症の影響により対面での実施が初回のみであったが、今年度はすべて対面で実施することができた。 熊本中央高等学校の生徒へのアンケート調査と授業実践は、これから進路を考える２年生のみを対象に実施した。授業実践は昨年同様全３回とし、１回目はアンケート調査結果を基に高校生の関心事に合わせた福祉に関する講義を実施した。２回目は、参加大学生によるキャリア形成についてのプレゼンを実施し、そのプレゼンをもとに高校生は個人・グループでのプレゼン資料作成に取り組んだ。そして、高校生は冬休みを挟む形で３回目のプレゼンに向けて発表資料を準備し、最終回にグループによるプレゼンを行った。 他方、今年度は効果測定の観点から、昨年度この高大連携に参加し、協力が得られた熊本中央高等学校の現３年生８名に対して、グループインタビューを実施した。 ３回目の授業実践終了後、大学生及び高校生それぞれに振り返りシートの記入を課した。その後、担当者３名で今年度の全体の振り返りと次年度に向けての課題等を検討した。 この後、成果報告書の作成に取り掛かかり、３月中には仕上げる予定である。
具体的な成果
今年度この事業に参加した高校生の振り返りでは、「進路について初めて真剣に考えた」、「自分自身に向き合うことができた」あるいは、「プレゼンに取り組むことで、まとめる力や自分の意見を伝える力が身に付いた」という、それぞれが何かしら自分の中で成長できた部分があった。また、参加した大学生の振り返りでは、「自分を見つめ直すきっかけになった」、「高大連携を通して改めて自分と向き合う機会が増えたことで、自分自身のことや将来を漠然とではなく、自分の芯を大事に持って考えるようになった」。そして、「今の高校生のリアルな想い、考えを自分の目で見ることができた」、「これからある教育実習への良い心構えになった」等の感想があった。 また、昨年度高大連携に参加した生徒へのインタビューでは、進路を決めるに当たって高大連携が役に立ったと、全員が回答した。具体的には、「自分の将来（進路）を考える機会になった」、「進路が明確になった」、「友達との話が弾んだ」、「間接的に大学のイメージが付いた」と、今年度参加の生徒と同じような感想だった。次に、高大連携で印象に残っていることとして、最後のプレゼンとその資料作成を挙げており、「プレゼンは苦手だったがやりがいがあった」との意見があった。 印象的だったことは、高校生の意見に「大学生ともっと関わりたかった」、「大学生のことをもっと知りたかった」という意見が多かったことだ。昨年度は初回のみ対面実施で、その後はすべてオンラインのため高校生と大学生の交流も制限されていた。この点は、今年度は対面で実施てきたため、特に高校生の意見としては挙がっていなかった。 以上が学生等の感想である。全体としては、昨年に引き続き２回目の取り組みであったため、担当教員間での共通認識も有りスムーズに進めることができた。本事業の2つの目的であった「福祉を学ぶ高校生が、福祉系大学への進学（接続）をスムーズに行い、進路選択に役立てること」と、「本学の学生に対して高校における福祉教育の現状を知り、高校の教育現場を実習以外で体験できる機会を提供し学びの機会とする」ことは、概ね達成できたと言える。今後は、高校生の「もっと大学生と関わりたい」という意見を踏まえ、現在の取り組みに加えて、高校生と大学生が一緒に、合同で取り組めるような機会が持てないか、検討していきたいと考えている。